

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第 36 回全国大会
第 27 回青少年国際交流全国フォーラム熊本大会
開催要綱

1 目的

内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加青年相互の交流と研鑽を図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。

2 テーマ

「私たちそれぞれの 365 歩のマーチ ～熊本から未来へ、そして世界へ～」

私たちの生きる現代は不確実性を抱えています。毎年のように起こる大規模災害や、新型コロナウイルスのような感染症などは今までの常識や生活様式へ大きな影響を与えました。そんな不確実性の時代を生き抜いていくためには、これまで以上に私達一人一人のレジリエンスが求められています。レジリエンスは逆境をチャンスに変えて成長する力ともいわれますが、水俣の環境問題や熊本地震からの復興など、難しい局面を迎えて 3 歩進んで 2 歩下がるというときも、歩みを止めることなく未来を見つめて進んできた力強い姿がありました。そんな熊本の人やその取組を知ることによって、参加者それぞれが持つべきレジリエンスのヒントを得て、これからの地域活動にいかすことを目的として実施いたします。

本大会の基調講演では、創業時は 7 坪 8 席の小さな熊本ラーメン店であった味千ラーメンが海外 13 か国で愛されるまで成長した軌跡を通じて、困難を乗り越え世界に羽ばたく秘訣を、味千拉麺チェーン本部 重光産業株式会社代表取締役副社長 重光悦枝氏に御講演いただきます。また分科会は「地域と青少年を育む」「伝統の復興」「グローバル防災」「クリエイティブ復興」の 4 つを設定しました。

基調講演や分科会を通じ、今抱えている地域課題や活動組織の課題解決に向けて、「グローバルな視点をどういかすか」「逆境をどう乗り越えるか」「災害復興支援や地方創生、若者の雇用などの社会的課題をどう解決するか」など、各自に必要な学びを得て、今後の事後活動にいかしていただければ幸いです。

3 主催

内閣府 日本青年国際交流機構 一般財団法人青少年国際交流推進センター 熊本県青年国際交流機構

4 後援

熊本県

5 主管

日本青年国際交流機構第 36 回全国大会熊本大会実行委員会

6 期日

令和 2 年 12 月 5 日(土)

7 会場

オンライン (Web 会議システム Zoom cloud meetings を利用)

8 対象者

内閣府及び地方公共団体が実施した青少年国際交流事業の既参加者、国際交流に興味がある青少年等

9 問い合わせ先

熊本大会実行委員会: kumamotoiyeo@gmail.com

10 参加費

全日程参加 1500 円

基調講演のみ 1000 円

分科会のみ 500 円

※内閣府国際交流事業に参加した方で、IYEO に平成 29 年度、30 年度、令和元年度に入会金／事後活動研修費を納めた方は、全国大会の参加費が一回無料となります。

11 参加申込

締め切り 11 月 20 日 (金)

申込みフォームにアクセスして、お申し込みください。

<https://iyeo-2020-kumamoto.peatix.com>

12 日程

12 月 5 日(土)

12:30～12:50 受付

13:00～13:20 開会式

13:20～14:45 基調講演

14:45～15:00 休憩

15:00～17:10 分科会

A・B ① 15:00～16:00 ② 16:10～17:10

C・D 15:00～16:45

17:15～17:45 帰国報告会

17:45～18:00 閉会式

18:00～19:00 懇親会

13 基調講演

テーマ：「熊本生まれ、世界育ち。～7坪8席で創業した味千ラーメンの挑戦～」

講師：味千拉麺チェーン本部 重光産業株式会社 代表取締役副社長 重光 悦枝（しげみつ よしえ）氏

14 分科会

■分科会 A 《地域と青少年を育む》（講話）

- ① 「水俣で暮らす、生きる」
- ② 「熊本と台湾高雄の架け橋に～熊本の未来を育むグローバルジュニアドリーム事業～」

■分科会 B 《伝統の復興》（講話）

- ① 「江戸時代の肥後米“穂増”を無施肥無農薬で栽培した農家の思い」
- ② 「帰ってきた熊本城のしゃちほこ」

■分科会 C 《グローバル防災》（ワークショップ）（定員 30 名）

「災害時における外国人支援と多文化共生の地域づくり
～熊本地震での災害多言語支援センターの実践から学ぶ～」

■分科会 D 《クリエイティブ復興》（ワークショップ）

「クリエイティブの力で未来を創る～BRIDGE KUMAMOTO の挑戦～」

15 実行委員会

| | | |
|--------|--------|--|
| 実行委員長 | 浜元 里菜子 | 平成 22 年度 第 17 回国際青年育成交流事業(ラオス人民共和国) |
| 副実行委員長 | 安永 愛子 | 平成 24 年度 第 25 回「世界青年の船」事業 |
| 執行部 | 生野 朋子 | 平成 26 年度 第 27 回「世界青年の船」事業 |
| 執行部 | 村本 きよみ | 平成 10 年度 第 11 回「世界青年の船」事業 |
| 執行部 | 本山 香菜子 | 平成 18 年度 第 33 回「東南アジア青年の船」事業 |
| 会計 | 嶋崎 梓 | 平成 30 年度 地域コアリーダープログラム(高齢者分野) |
| 委員 | 岡崎 史裕 | 平成 29 年度 地域コアリーダープログラム(障害者分野) |
| 委員 | 小野 栄治 | 昭和 57 年度 第 16 回「青年の船」事業 |
| 委員 | 小林 志穂 | 令和 元年度 地域コアリーダープログラム(高齢者分野) |
| 委員 | 齋藤 登 | 昭和 57 年度 第 16 回「青年の船」事業 |
| 委員 | 齋藤 憲子 | 昭和 57 年度 第 16 回「青年の船」事業 |
| 委員 | 坂井 華海 | 平成 26 年度 第 36 回日本・中国青年親善交流事業 |
| 委員 | 高埜 健 | 昭和 56 年度 第 8 回「東南アジア青年の船」事業 平成 9 年度 第 24 回「東南アジア青年の船」事業 ナショナルリーダー |
| 委員 | 武元 典雅 | 昭和 52 年度 第 11 回「青年の船」事業 |
| 委員 | 寺嶋 章江 | 平成 16 年度 第 17 回「世界青年の船」事業 |
| 委員 | 中村 篤 | 令和 元年度 地域コアリーダープログラム(障害者分野) |
| 委員 | 湯元 綾香 | 平成 17 年度 第 27 回日本・中国青年親善交流事業 |

《開催案内詳細》

■基調講演

テーマ：「熊本生まれ、世界育ち。～7坪8席で創業した味千ラーメンの挑戦～」

内容：1968年、7坪8席の小さなラーメン店からスタートした味千ラーメン。現在、国内74店舗、海外776店舗、合計850店舗を展開しています。2007年11月には、米経済誌『ビジネスウィーク』が毎年発表する「アジア成長企業ランキング」で、「味千ラーメン」の中国フランチャイズ企業である味千中国ホールディングスがトップ企業に選ばれました。現在では、中国だけでなく、東南アジアの国々や、北米、オーストラリアでもチェーン展開されています。熊本の味、のれん、伝統というものを大切にしつつ、固定観念に固執しない味づくりにも挑戦し、常に新しい発想をもって世界へと広がっています。その成功の影に海外出店での失敗や信頼できるビジネスパートナーとの出会いがありました。人と人とのつながりを大切に、創業者の「世界中にラーメン大好き人間を創りたい」という思いを繋ぎ、地方都市、熊本に根付きつつ、グローバルな視点を持って挑み続ける味千ラーメンの取組や理念をお話しして頂きます。

講師：味千拉麺チェーン本部 重光産業株式会社 代表取締役副社長 重光 悦枝（しげみつ よしえ）氏
熊本市出身。大学卒業後、地元ラジオ局のキャスターとして活躍。その後単身渡米し、NYの大学でホテル・レストラン経営を学ぶ。1996年熊本に戻り、味千拉麺チェーン本部である重光産業株式会社に入社。取締役広報室長を経て、2014年、代表取締役副社長就任。国内外を飛び回りながら、味千ラーメンのグローバル化に励む。

■分科会

【分科会 A 《地域と青少年を育む》（講話）】

A①：「水俣で暮らす、生きる」

内容：水俣は、長い間、食べ物に「水俣産」と言えない時代が続いてきました。「MINAMATA」を世界的に有名にした産業公害。あれから60年の年月を経た今の水俣は、環境モデル都市として、人々の努力によって元の豊かな海を取り戻しています。また、60年という年月を積み重ね、食べ物に対しての意識の変化も少しずつ見えてきています。本分科会では、甘夏を通して水俣を伝える生産者チーム『甘夏引力』の福田氏・大澤氏・高倉氏と水俣に根差した食のセレクトショップ『もじょか堂』の澤井氏から水俣でリアルに生きる30代・40代の声を聞いていただきたいと思います。そして、『水俣の食や自然』に関する情報を共有することで、参加する皆さんが暮らすそれぞれの街の食や自然に関心を向け、それを切り口とした地域発展・地域活性に貢献するためのヒントにしていきたいと思います。

講師：○福田農場 専務取締役 福田 浩樹（ふくだ ひろき）氏

1980年水俣市生まれ。東京農業大学を卒業後、北海道のベンチャー企業などで勤務した後、2009年に帰水。父親を含めて水俣を世界に伝える先人達の姿がカッコ良かったのが戻ってくる

動機。今年で60年を迎える観光農園の3代目。

○からたち 大澤 菜穂子（おおさわ なほこ）氏

1973年水俣市生まれ。高校卒業後水俣を出たが、残りの人生水俣で過ごしたいと漠然と思い、30代で帰郷。無農薬の甘夏を販売していた両親の仕事を継ぐ。夏季はSUP（マリンスポーツ）体験も始め、新たな水俣との出会いの場作りを模索中。マルチ*なしの自然栽培サラダ玉ねぎ作りに挑戦中。*マルチ（＝マルチングフィルム）：作物の株元を覆うフィルム

○ガイアみなまた 高倉 鼓子（たかくら つづみこ）氏

1987年水俣市生まれ。大学卒業後、就職。その後、2013年に帰郷。甘夏みかんの栽培に興味を持ち、ガイアみなまたで働き始めて7年目を迎える。兄とともに柑橘の草生栽培を実践中。

○株式会社もじよか堂 代表取締役 澤井 健太郎（さわい けんたろう）氏

1979年水俣市生まれ。大学卒業後、横浜市の建設会社にて施工管理に従事。2007年水俣市に戻り、もじよか堂の屋号で自然養鶏を開始、2014年法人化し、代表取締役就任。

A②：「熊本と台湾高雄の架け橋に～熊本の未来を育むグローバルジュニアドリーム事業～」

内容：熊本県では、未来の熊本を担う小中高生を台湾に派遣し、異年齢の集団や台湾の方々と交流することを通して、自分の夢と可能性を発見する機会を提供すると共に、グローバルな視点から「生きる力」や思いやりとたくましさを持った子どもの育成を図ることを目的に、グローバルジュニアドリーム事業を実施しています。青少年がリーダーシップや国際感覚を身に着けるための方策を県の担当者・高校生リーダー2名*・成人スタッフの4者からパネルディスカッションを通して、各地での青少年育成の参考にさせていただければと思います。 *参加当時

講師：○熊本県環境生活部くらしの安全推進課 立川 桂佑（たちかわ けいすけ）氏

熊本県天草市出身。小国町立小国中学校、菊池市立菊池北中学校に社会科の教員として勤務。2019年に成人スタッフとして本事業に参加した後、2020年に熊本県庁へ出向。主催者側として本事業に携わる。

パネリスト：

○熊本大学 工学部情報電気工学科 3年

下川 飛翔（しもかわ つばさ）氏 2017年高校生リーダーとして参加

○熊本県立大学 環境共生学部環境共生学科 居住環境学専攻 1年

村上 智江里（むらかみ ちえり）氏 2018年高校生リーダーとして参加

○熊本県青年国際交流機構 会員 湯元 綾香（ゆもと あやか）氏

2016年および2019年成人スタッフとして参加

ファシリテーター：

○日本青年国際交流機構 運営委員 犬尾 陽子（いぬお ようこ）氏

【分科会 B 《伝統の復興》（講話）】

B①：「江戸時代の肥後米“穂増”を無施肥無農薬で栽培した農家の思い」

内容：穂増は稲の品種の一つであり、江戸時代に栽培されていた古代米です。熊本県で盛んに栽培され

た熊本在来種であり、江戸時代に熊本を中心に、九州一円で栽培され、大阪堂島米会所で天下第一の米と称されていました。しかし、米の量産が目指されるようになった時代の流れに取り残され、作る農家もいなくなりました。近年、菊池川流域の農家達が穂増を見つけ出し、長い年月を経て復活を遂げました。たった40粒の種籾を、無施肥無農薬で栽培することに成功した農家の事例として、米農家の実取義洋氏にお話を伺います。逆境に負けず1を100にする地域活動のヒントを得ていただきたいと思います。

講師：實取（実取）義洋（みとり よしひろ）氏

1980年生まれ 熊本県菊池市龍門地区出身。長女の小学校入学を機に2009年に同地区へUターン。少子高齢化の進む地域で子ども6人のPTA、消防団、農協など中山間地の各種役職の担い手となっている。2012年、米農家として新規就農。2014年、「選ばれるお米を作る」に共感し日本お米協会の設立に係る。2018年、「夢を持てる米づくりで熊本のいとなみ復興」熊本ごはん組を立ち上げ、バケツ稲を使って米農家と消費者を繋げる。同活動にて江戸時代の熊本在来稲「穂増」の復活を果たす。2019年、菊池川流域の稲作文化の世界発信を目指して酒蔵との連携スタートしている。

B②：「帰ってきた熊本城のしゃちほこ」

内容：熊本県民が復興のシンボルとして心の拠り所とする熊本城。2016年4月に発生した熊本地震で、熊本城天守閣のしゃちほこは落下し破損。新たに制作したのは、先代の制作者の息子である藤本康祐氏でした。「しゃちほこは父が精魂を込めた作品。復興のシンボルを自分の手で復元を」と余震が続く中でも作業にあたりました。震災から2年後の2018年、多くの課題を乗り越え、しゃちほこは大天守に帰ってきました。小天守のしゃちほこの制作は、東京からUターンしてきた康祐氏の御息子が担当し2020年8月に設置。藤本氏親子のしゃちほこが、これからも熊本の街を見守り続けます。伝統を脈々と受け継ぎ、熊本復興のシンボルの制作にあたった思いを伺うことで、各地の復興や再生のヒントを得て地域活動にいかしていただきたいと思います。

講師：藤本鬼瓦代表 藤本 康祐（ふじもと こうすけ）氏

1960年熊本県宇城市小川町生まれ。父であり師匠である藤本勝巳氏より鬼瓦づくりの技術を学び、全国的にも数少ない鬼瓦を専門に作る“鬼師”となる。熊本城の鯨などをはじめ、文化財や寺社仏閣用の特殊装飾瓦を復元する業務を専門分野とし、現在は若手育成にも力を入れ活動中。代表的な作品として龍王神社、巨大鬼瓦がある。2007年に、熊本城天守の鯨瓦に破損が見つかり、小天守鯨瓦を制作。2017年には、熊本城天守閣復旧整備工事に伴い、大天守鯨瓦を制作。

【分科会C《グローバル防災》（ワークショップ）】（定員30名）

「災害時における外国人支援と多文化共生の地域づくり

～熊本地震での災害多言語支援センターの実践から学ぶ～

内容：外国人労働者や訪日外国人客の増加に伴い、言語や文化・習慣の違いから「災害弱者」となる外国人支援策が課題となっています。2016年の熊本地震の際は、熊本市国際交流会館に設置され

た「災害多言語支援センター」のスタッフが避難所を巡回し、自治体が出す支援情報を多言語に翻訳して発信するなどの支援を行いました。震災時には課題を抱えた外国人が、炊き出しや物資配布など支援側にまわる姿もありました。豪雨や台風等の自然災害が相次ぎ巨大化する近年、大切なのは外国人・日本人住民が支え合う「多文化共生の地域づくり」。今回は被災した外国人が抱えた不安や支援活動での課題をオンライン上で体験し、災害に強いまちづくりについて一緒に考えます。

講師：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団 事務局長 八木 浩光（やぎ ひろみつ）氏
国際交流・国際協力及び多文化共生事業を企画・実施し、熊本市の活性化と発展を推進。特に、多文化共生分野では、2010年、2015年、2018年に、「熊本県内における生活者としての外国人への日本語教育に関する考察」を調査、発表。現在、熊本市の地域日本語教育体制づくり、県内八代市他の日本語教育空白地解消事業に参画している。2016年熊本地震時には、外国人避難対応施設および災害多言語支援センターを運営した。

【分科会D 《クリエイティブ復興》（ワークショップ）】

「クリエイティブの力で未来を創る～BRIDGE KUMAMOTO の挑戦～」

内容：一般社団法人 BRIDGE KUMAMOTO は、2016年の熊本地震をきっかけに「クリエイティブの力で復興支援」する団体として設立されました。地元・熊本のクリエイターを中心に、独創的なアイデアで、災害復興支援や地方創生、若者の雇用などの社会的課題を解決することを目指し、活動を行っています。熊本地震の際、被災家屋の雨漏り防止に使われたブルーシートを再利用して生み出されたトートバッグ「ブルーシードバッグ®」は、2017年度のグッドデザイン賞「ベスト100」と「特別賞（復興デザイン）」を受賞。これまで3000個以上を販売し、売上金の一部を、復興支援団体などに寄付しています。

今回は、団体設立の経緯や、様々な角度から社会課題に向き合うヒントについてお話をいただきます。分科会の最後には、熊本地震から1年後にスタートした「あやとりチャレンジ」を参加者のみなさんにも体験していただきます。あなたと熊本を繋ぐ、あやとりの橋をかけてみませんか？

講師：○一般社団法人 BRIDGE KUMAMOTO 代表理事 佐藤 かつあき（さとう かつあき）氏
1978年、長崎県佐世保市生まれ。福岡、東京などでデザイナーとして活動し、妻の出産を機に妻の故郷である上天草市大矢野町へ転居。2013年、熊本市で「かつあきデザイン」を開設し、2018年に「株式会社かつあき」に法人化。企業や団体・組織、商品・サービスの販促・広告・PRに関わるすべてのクリエイティブを手がける。2016年の熊本地震をキッカケに「BRIDGE KUMAMOTO」を立上げ、「クリエイティブの力で未来を想像する」を合言葉に活動を開始。
○一般社団法人 BRIDGE KUMAMOTO 事務局長 村上 直子（むらかみ なおこ）氏
1983年、熊本市生まれ。電波高専卒業後、東京のIT企業にて技術者として12年勤務。熊本地震をきっかけに熊本に戻り、現在は「人格教育スクールEvangelista」での講師を本業とし、時々保育園で給食を作る傍ら、「BRIDGE KUMAMOTO」の事務局としても活動。